生徒の自主的・実践的な態度を育てる特別活動の在り方

日立市立多賀中学校

1　はじめに

本校では，生徒の自主的・実践的な態度の育成や，集団活動を通してより良い人間関係の育成を図ることを目標として積極的な特別活動を推進してきた。しかし，今年度はコロナウィルス流行のため，例年行っている活動を削減したり，内容を変更したりすることがあり，特別活動について今まで以上に考える年になった。生徒の発案により新たに行った活動もあり，それが充実感や達成感につながることもあった。

2　資料

⑴　６月，「コロナウィルスに対する警戒心が薄れてきている」という生徒の言葉から，生徒会役員と保健委員会によるコラボ企画「コロナ感染症への意識を高めよう！」を行った。各教室や職員室を訪問し，クイズや寸劇を通して，小まめな手洗いやマスク袋使用の徹底など感染症対策のルールを再確認した。

⑵　７月，「コロナウィルスで様々な活動が削減される中，多賀中を元気づける方法はないか」という議題のもと，生徒会役員で話し合った。そこで，最も制限が大きい給食の時間を楽しいものにするために「多賀中先生クイズ」を行うこととした。「○○先生は中学生の頃，何部だったでしょう」や「○○先生と知り合いの有名人は誰でしょう」といったクイズで，教師を身近に感じることにもつながった。

⑶　１１月，多賀中学校の文化祭であるかしわ祭では，例年ステージ発表として有志によるダンスや漫才を行っている。今年度は予め動画に撮り，当日動画による発表という形で行った。また，合唱コンクールは学年毎に時間を区切って体育館で行った。

⑷　１１月，「校内消毒ボランティアを行って下さっている方に感謝の気持ちを伝えられないか」という議題が生徒会役員内で挙がった。話し合いの結果，各学級で黒板に感謝の気持ちを書き，それを写真に撮ってすることになった。

3　成果と課題

○　感染症対策を行いながらの特別活動ということで，今まで慣例的に行ってきた行事の必要性を再考する機会となった。ボランティアの方への感謝の黒板メッセージなどの企画は今年度初めて行ったが，感謝の気持ちをもったり，地域の方とつながったりすることができた。

○　生徒は「どのように変更すれば例年通りに活動できるか」という視点で肯定的に考えるようになり，主体性や必要感をもって活動の企画や運営ができた。

○　生徒会役員と保健委員会とのコラボ企画では，委員会を横断して活動することができた。

●　全ての活動で，例年通りできるのか，できないならばどのように変更するかということを考えたので，立案から実施まで時間が経ってしまうことが何度かあった。自主的・実践的な態度は育まれたが，生徒への時間的な負担が増えてしまったと感じる。